

子どものためのアクティビティプログラム調査研究

- 男女共同参画による子育て支援のためのアクティビティプログラム開発と
空間提案 -

会津大学短期大学部

産業情報学科

柴崎 恭秀

子どものためのアクティビティプログラム調査研究

- 男女共同参画による子育て支援のためのアクティビティプログラム開発と 空間提案 -

柴崎 恭秀

平成 19 年 12 月 20 日受付

【要旨】本研究は平成 18 年度福島県地域調査研究助成による委託研究である。建築・都市計画、環境計画分野における子どものためのスペース研究は、今日まで主に都市部を中心とした研究が多く、東京工業大学仙田満名誉教授による東京、横浜を中心とした研究がよく知られている。

本研究がスタートした平成 18 年度は文部科学省で「子どもの居場所づくり」と題した子どもの環境づくりを教育の観点から進める「地域子ども教室」が予算化・組織化された年度であり、これが公立小学校を中心に設置された時期である。また他方では各地で子どもが凶悪事件に巻き込まれることが多発した頃でもあり、子どもの生活環境の安全性についても社会の目が向けられる時期でもあった。

本研究は地方都市、地域社会での子どもの生活環境が如何なるものかを「あそび環境」を糸口に行った調査研究である。特に福島県では「子どもクラブ」と呼ばれる学童保育所が設置されており、主には小学生低学年の一時預かり施設の役割を担っている。この子どもクラブでの子どもたちのあそびの調査、日頃のあそびやあそび環境の調査を観察調査とアンケート調査によって分析を行っている。また、より創造的、活動的なあそびをサポートする施設やそこでの活動についても児童館、子供館を中心に観察調査、ヒアリング調査を行っている。またアンケート調査では父親の子育ての参画についても聞いているが、これは特に福島県からの要請もあり調査内容に付加したものである。

本研究は以上のような調査を中心に平成 18 年 4 月から平成 19 年 3 月の期間行い、本文は委託研究の研究報告書として作成した本編 148 頁、資料編 131 項、計 279 項の分析結果を新たに抽出、再構成しまとめたものである。

研究の目的

本調査研究では、地域課題である学童保育と子どものあそび環境の在り方を子育てという観点で行う。福島県には小学生の放課後施設として学童保育所がある。会津若松市では「子どもクラブ」と呼ばれているが、学童保育所の多くは、子どもたちの放課後のあずかり施設の機能を担っている。近年では子どもたちが放課後に事件に巻き込まれるケースが多発しているため、学童保育とあそび環境に新たな問題が加重に負荷されてきている。学童保育所のスタッフの方々にお話を伺うと、最近では安全対策や犯罪対処の講習を受けるなど直近の問題にも対応しているということだった。

学童保育所は小学校が終わる午後2時頃から夕方までの父兄の送り迎え時間までの数時間を週のうちの4、5日間を子どもたちが過ごすため、実は家庭、学校に続く子どもたちの生活環境である。また、一昨年度から文部科学省が行ってきた「子どもの居場所づくり」の具体策である「地域子ども教室」が本年度から予算化、組織化され、公立小学校を中心に本格的に活動を行っていくことが決まっている。

本調査研究では、子育て支援施設ともいえる子どもクラブ(学童保育所)を、会津若松市を中心に調査し、子どもたちが積極的に学ぶことのできる創作活動や学習、ボランティアなどの「自発的活動」を構築するための積極的行動プログラム(これを「アクティビティプログラム」と名付ける)を抽出してまとめ、分析を行った上で地域に対して提案することを目的としている。また、アクティビティプログラムを行うためのスペースをアクティビティスペースと呼び、今後どのようなアクティビティスペースが考案できるかを検討する。

調査対象としては会津地域の子どもクラブ以外に、わが国における児童館、野外活動施設、さらには最近になってその活動が注目されている東京都世田谷区のプレーパークなども調査対象として、観察調査、ヒアリング調査を行い、その実態と可能性も探っていく。

調査では、1)文献調査、2)アンケート調査、3)会津若松市における子どもクラブ(学童保育所)のスペース調査、4)子どものためのスペース調査、の4つの方法で調査を行い、子どものあそび環境における現状、子どもたちが利用者の対象となる建築物(スペース)などを把握した。

アンケート調査については、会津地域における公立小学校(3校)と、私立小学校(1校)の子どもたち及び保護者を対象に、普段の生活における子どものあそびとあそび環境、地域子ども教室と子どもクラブに参加したことがある子どもに見られる変化などを把握した。また、近年利用が増加傾向にある学童保育所の現状を把握し、子どもたちの放課後のあそび空間や学童保育所に所おけるスタッフ体制の客観的な評価を行うことも重要であるため、子どもクラブのスタッフにもアンケート調査を実施した。

子どもに対するアンケート調査 - 分析・考察

子どもに対するアンケート調査では、会津若松市における小1～小6の児童生徒を調査対象とし、281人にアンケートを依頼したところ、269人から回答を得られた。(回収率95.7%)アンケートの内容については、1. 普段の生活や地域への関心など、2. 家族形態や父親、母親との関わり、3. 地域子ども教室に参加した感想や自身の変化など、4. 子どもクラブに通うようになってからの感想や交流関係について把握した。各項目については以下の通りである。

普段の生活や地域への関心など

子どもたちの多くは、放課後に家で友だちとあそんだり、塾に行ったりして過ごしている。普段のあそびについては、友だちとテレビゲーム・ポータブルゲームやボールあそびなどをしている子どもが多く、また塾については、ほとんどの子どもが何かしらの塾に通っている。塾の内容については、「ピアノ」が圧倒的に多く、次いで「スイミング」と「スポーツ少年団」が多かった。地域活動等への参加についてみると、全般的に参加している子どもは少ないが、「近所のお祭りなどへの参加」については、比較的参加している子どもが多い。自分が住んでいる地域で、顔と名前の両方を知っている大人、いつも声をかけてくれる人の存在については、子どもたちの多くが「いる」と認識しており、放課後一緒にあそぶ友だちよりも、顔と名前の両方を知っている大人の方が多いことが分かった。勉強については、子どもたちの多くが好きな教科として「図工」と「体育」を挙げており、「音楽」、「道徳」、「算数」についても、半数以上の子どもが好きな教科としている。将来については、ほとんどの子どもたちが具体的ではないが、何かしらの将来の夢を持っているようであり、多様化していることが挙げられる。

家族形態と父親、母親との関わり

家族形態は、4～5人の核家族が最も多いが、祖父と祖母がいる家庭の割合は、全体の約4割と都市部と比べても圧倒的に多く、会津の地域性として挙げられる。父親、もしくは母親のいない家庭の割合については、決して少なくはない。両親と1週間のうちにどのくらいあそぶかという問いに対して、父親については、1週間のうち「あまりあそんでいない」、「1日～2日あそんでいる」とした子どもが多く、あそびの内容をみると、「キャッチボール」や「テレビゲーム・ポータブルゲーム」が多い。母親については、1週間のうち「全然あそばない」、「あまりあそばない」とした子どもが多く、あそびの内容をみると、「トランプ」、「バトミントン」、「テレビゲーム・ポータブルゲーム」が多い。このことから子どもたちの多くは、両親に対して「あまりあそんでいない」と感じている、ということが分かった。あそびの内容については、父親とは外あそび、母親とは内あそびをしてあそんでいる傾向があるが、両者においてもテレビゲーム・ポータブルゲームをしてあそぶ割合は高くなっていると言える。

子どもクラブ（学童保育所）に通うようになってからの感想や交流関係

子どもクラブに対する子どもたちの認識度は、学校の空き教室で運営している子どもクラブもあるため、地域子ども教室よりも高く、実際に子どもクラブに通っている子どもは、全体の約2割程度である。子どもクラブでの活動内容については、主に勉強とあそびをしていると答えた子どもが多く、全体の約7割が「とても楽しい」と感じているようである。楽しいと感じた活動としては、「子どもクラブ対抗ドッチボール大会」が最も多く、親子で参加することができ、イベント性のある活動の人気の高い。子どもクラブにおいても地域子ども教室と同様、友だちの存在と面白い活動内容の2点が主な評価軸となっている。好きな場所については、「2階の部屋（和室）」と「ホール」が多く、天候に左右されずに色々な活動の出来る、屋内の広々としたスペースと、広くはないが少人数でその場の雰囲気作りやすい可変性のあるスペースの2種類が挙げられた。子どもクラブに通うようになってからの交流関係については、子どもたちの半数が違う学年の友だちが増えたとしている。下校手段については、両親が迎えに来る子どもがほとんどだが、子どもクラブによっては、集団帰宅させている所もある。今後の子どもクラブについては、花火やお祭りなど、イベント性の高いものをしたいと感じているようである。

保護者に対するアンケート調査 - 分析・考察

保護者に対するアンケート調査では、会津若松市における小1～小6の児童生徒の保護者を調査対象とし、212人にアンケートを依頼したところ、172人から返答を得られた。（回収率81.1%）また、父親と母親を区別し、両者の立場から意見を収集することを意図したが、アンケートを依頼する時点で、父親と母親に限定してアンケートを依頼することが困難だったため、最初の性別判断で父親と母親の区別が分かるようにした。アンケートの内容については、1.保護者の年齢や子どもとの関わり、2.地域子ども教室に参加した子どもの感想や子ども自身の変化、3.地域子ども教室に参加した保護者の感想や今後の参加意向、4.子どもクラブを利用している家庭の割合と通っている子どもの感想、5.プレーリーダーやコーディネーター（コーディネーターとは子どもたちにあそび場、創作などを指導する講師・ボランティアを提供できる人のことで、プレーリーダーとはあそび・創作を指導する講師・大人を指す）についての保護者の意向、6.子どもの事故や事件、今後の社会について、の6つの項目について把握した。各項目については以下の通りである。

保護者の年齢や子どもとの関わり

アンケートの回答者は、30代・40代の母親が多く、子どもの数についてみると、2人が最も多い。1週間のうち子どもとあそぶ日数の割合については、保護者の8割が、「最低でも1～2日はあそんでいる」と感じており、子ども自身の受け止め方との違いが見られる。（子どもに対するアンケートでは半数の子どもが両親とはあまりあそばないと回答）。普段の子どもとのあそびの内容については、トランプやテレビゲーム・ポータブルゲーム、ボールあそびをしている家庭が多い。

子どもクラブ（学童保育所）を利用している家庭の割合と通っている子どもの感想

子どもクラブを利用している家庭は全体の約1割と少ないが、利用する理由として、全ての保護者が「仕事で子どもが帰ってくる時間に家にいない」ことを挙げており、子どもクラブの必要性を示している。なお、子どもクラブを利用している全ての保護者が、子どもは子どもクラブでの活動を楽しんでいると評価している。そう思う理由としては、多くの友だちとあそべる点と、様々な体験ができる点、普段できないことができる点が上位に挙げられている。今後保護者が子どもクラブに望むこととしては、「宿題の指導などの学習指導」が最も多く、「スポーツや運動など身体を動かす活動」、「子どもの自由なあそびや自発的な活動」、「地域の山や川などでの自然体験活動」、「家事や料理などの生活活動」が多い。

プレーリーダーやコーディネーターについての保護者の意向

プレーリーダーやコーディネーター（以下「プレーリーダー」と省略）については、保護者の約半数が「進んでやりたいとは思わない」としており、「やりたくない」とあわせると、約7割の保護者がやりたくないとしている。また保護者がプレーリーダーとなり、子どもたちと活動する企画については、保護者の約9割が参加したい・させたいとしている。地域子ども教室に対しての質問と同様に、企画という小さなくりで、自らが参加する立場の場合は、参加したいというプラスの意見が多い。保護者がプレーリーダーとして子どもたちに指導できることについては、回答者のほとんど（約9割）が母親だったこともあり、「料理」や「手芸」などの、母親が日常的に行っているものが多く、次いで「パソコン」「お菓子作り」「工作」が上位に挙げている。また、父親が指導できることとしては、「パソコン」や「工作」、「スポーツ」などが多かった。

以上の調査、分析を通して、子どもの本来あるべき姿とは、1つのことに夢中になり、思いっきり目の前のことを楽しむ姿であると感じた。しかし実際は、あそぶスペースや方法を安全面などから大人（保護者）に制限されている場合がほとんどである。そのため、現代の子どもたちは自ら何かを始める、新しいことに挑戦する、ということが不得意である。子どもの自発的活動を促すには、プレーリーダーのような形で、子どもたちにあそびの指導や外あそびの方法を伝え、そして安全管理を担う人々が必要と言えるだろう。また、子どもクラブなどの施設においては、子どもたちが普段体験できないプログラムを中心に、子どもたちの興味関心を引き、発見や気づきを促すことが重要である。

父親のアクティビティプログラムへの参画について

今回の調査研究では、われわれは子どもたちと大人、特に父親とのあそびやあそび環境について注目した。それは東京と同様に地方でも近所で友だちと遊ぶ環境がない、遊ぶ友だちが少ない、テレビゲームやポータブルゲームがあそびの主流になっている今、子育ての観点からも子どもたちの創造や自然体験などを積極的に行っていくアクティビティプログラムが必要であると考えたこと

に端を発している。アクティビティプログラムを実践していくには地域ごとでプレーリーダーと呼ばれる役割が必要になり、それらは地域で仕事をする大人、特に子どもたちの父親がその役割を担っていくことが理想と考えられる。

会津若松市で行った子どもたちを対象としたアンケート調査の結果では、普段父親とよくあそぶと回答した子どもは全体の約2割程度であった。あそびの種類も2番目にテレビゲームやポータブルゲームがきている。保護者を対象としたアンケート調査では、当初、父親に対する質問を入れていたが、小学校からの指摘で父親に限定した質問を除くことになった。会津若松市においても離婚家庭は多く、父親のいない家庭への配慮からであった。保護者を対象としたアンケートに父親と母親のどちらが回答したかを集計するために回答者の性別を聞き、その問いによりアンケートの回答者が父親か母親かを判断することとしたが、回答者の87%が母親で父親が回答しているものが少ないことが明らかとなった。この点で父親が子どものあそびや子育てなどにどの程度関わっているかを知る方法として工夫が必要であると考えられる。

この保護者に対してのアンケート調査の質問には、先にあげた地域のプレーリーダーの必要について説明し、この役割を担えるかについて質問している。興味深かったのはプレーリーダーの役割を担えるかという問いに対しては75%が関心を示さないが、自分の子どもと一緒にプログラムでプレーリーダーの役割を担えるかという問いに対しては70%が参加したいという積極的な回答を寄せている。これは保護者がこのようなプログラムを子育てのひとつとして捉えていることが伺える。

アンケート調査を通して、父親が子育てに積極的に関わっている様子は伺えず、家庭ではやはり母親が子育ての中心であることは今までと変わらないと考えられる。しかし、ヒアリングや子どもに関連する施設の観察調査では積極的に子育てやアクティビティプログラムに加わっている父親の姿を確認することができた。会津若松市内にある私立小学校のザペリオ学園小学校では父親のための子育て学校（毎月夕方から夜開講している）に積極的に参加し、同子育て学校が主催した森林教室に足を運ぶ父親の様子も伺うことができた。

また、地域子ども教室でも重要な位置づけとなっているプレーリーダーには地域の父親の存在は不可欠であり、父親の日常の仕事などを通して子どもたちにアクティビティプログラムを提供できる状況が子どもたちにとっては必要であると考えられ、父親を中心とした地域での取り組みが期待される場所である。